

訶梨帝母の形相の二類性について(上)

——十六大護図にみる忿怒尊訶梨帝母像をめぐる——

田代有樹女

目次

はじめに

一、柔和相訶梨帝母

二、訶梨帝母法とその功能

三、忿怒尊としての訶梨帝母

1、十六大護とその尊容

2、十六大護図の修法と功能

結び

はじめに

周知の通り、訶梨帝母の形相には柔和相と忿怒相の二類⁽¹⁾⁽²⁾が認められる。

訶梨帝母は、西域に発祥以来、⁽³⁾疱瘡の神、あるいは安産子育てといった子供の守護神として拝されて来た。また食堂^{じきどう}に祀り、食事作法^{じきじ}等の修法に用いられると同時に、増益、息災、降魔調伏等、あらゆる現世利益や幸福をもたらす、救済の女神として現在なお、祈禱の本尊⁽⁴⁾としても尊崇⁽⁵⁾されている。

複数的な機能を持ちながら、長い歴史に及んで信仰されて来た、この女神自体の有する神格もまた多面的なものであった。そのためか、幾多の造像がなされた訶梨帝母像は、種々の形像を残している。

形像についての概要は、すでに述べたところであるので繰り返さないが、形相においての一般的な定説をあげるならば、柔和相訶梨帝母と忿怒相鬼形鬼子母神とが形相の二大別とされ、前者は安産子育てといった民間信仰の対象であり、後者を訶梨帝母法の祈禱の本尊であるとして、この祈禱本尊としての訶梨帝母を、日蓮以降の日蓮宗内に於て変容を遂げた鬼形鬼子母神にのみ結び付け、忿怒尊を即ちこの鬼形とすることにある。

ところが、経軌に説かれている訶梨帝母法によれば、その像造法に、容姿端麗な天母形とすることを形像事とし、図像には明らかに柔和相と認められる訶梨帝母像が描かれていたり、あるいはまた、現に行われている訶梨帝母儀礼の本尊として、柔和尊が用いられている例⁽⁸⁾も見られるのである。

他方、祈禱本尊とされる鬼形鬼子母像においては、密教儀軌編纂の後に、我国独自のものとしてその尊容が生み出⁽⁹⁾

されたのであるから、当然のこと儀軌には載せられていないのであるが、ここで指摘すべきことは、日蓮宗で用いられている鬼形鬼子母とは形像を異としながらも、忿怒尊としての訶梨帝母像が、すでに儀軌にあげられていることである。

それらは、十六大護図(図1-6)、四種護摩本尊及眷属図像、宝楼阁曼荼羅の中の諸尊に含まれているもので独尊ではないが、密教儀軌の伝来は空海よりとされているところから、忿怒尊訶梨帝母は、日蓮以前から修法と深く係りを持っていたものと察せられる。

このようなことを踏まえてみると、形相の二類性と信仰形態の定義付けは、容易になされるべきものではなく、修法としての本尊である柔和尊と、特に日蓮以前の忿怒尊についての研究は、猶今後に待たねばならないことであろう。

日蓮宗内で尊容の変遷を遂げた訶梨帝母像は、『法華經』擁護という立場から、十羅刹女との関係を持ち、曼荼羅においても、必ずしも独尊を取るとは限らず、またいつ頃から独尊の鬼形となったのか等々、問題点も多く残すのであるが、この面についての研究は、すでに進められているところであるので、本小論では、別の視点から、忿怒相の発祥を探る一つの手懸りとして、十六大護図を取り上げ、そこに見る忿怒尊訶梨帝母像をめぐって、形相の二類性と修法が、どのような係りを持っているのか考察をしていきたい。

まずはじめに、訶梨帝母の形相について触れておきたい。

[注]

(1) 訶梨帝母は原語で、ハーリーティー、あるいはハーリーティなどと呼ばれ、我国では、鬼子母神をはじめ、数十の呼び名がある。本稿では、訶梨帝母の名称を用いることとする。名称については、拙稿「訶梨帝母の持物・『吉祥集』について」

『名古屋造形芸術短期大学研究紀要』第七号、昭和五十九年）、一〇五頁—一〇八頁参照。

(2) 前掲拙稿「一二頁参照。」

(3) cf. H. Zimmer, *The Art of Indian Asia*, N. Y., 1946, pp. 135~138.

cf. P. Pal, *The Arts of Nepal*, E. J. Brill, Leiden, Leiden/Köln, 1974, pp. 42~44.

cf. L. S. Bangdel, *The Early Sculptures of Nepal*, New Delhi, 1982, pp. 31~33.

(4) 『南海寄歸内法伝』巻第一(『大正蔵』五四・二〇九頁、中段)では次のように記されている。

西方諸寺。毎於門屋處。或在食厨邊。素畫母形抱一兒子。於其膝下或五或三以表其像。毎月於前盛陳供食。其母乃是四天王之衆。大豐勢力。其有疾病無兒息者。饗食薦之咸皆遂願。廣緣如律。此陳大意耳。神州先有名鬼子母焉。

また『大藥叉女歡喜母并愛子成就法亦名訶哩底母經』一卷(『大正蔵』二一、二八六頁、上段参照)、『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第三一(『大正蔵』二四、三六二頁、中段参照)などにも食事に關する記述が見られ、よく知られる園城寺訶梨帝母像については、かつて食堂に祀られていたことが知られ(『阿婆縛抄』第百四十、『大正蔵』圖像部九、四四二頁、下段、二六行目—二八行目参照)、東大寺、二月堂の訶梨帝母坐像は、現在も食堂に安置されている。また現行の真言宗勤行では、その『仏前勤行次第』(高野山出版社印刷局)の「食事略作法」の中で訶梨帝母、鬼神等の名をあげている。

(5) 我国では日蓮宗において、訶梨帝母法に基づく祈禱が行なわれており、現在ネパールでは、病氣や子育てあるいは、あらゆる祈願をかなえてくれる現世利益の守護神として、金剛乗の儀礼による崇拜がなされている(拙稿「ネパールにおけるハリーティについて——調査報告——」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第六号、昭和五九年)参照)。

(6) 前掲拙稿「訶梨帝母の持物・『吉祥菓』について」及び「ネパールにおけるハリーティについて——調査報告——」
同右

(7) 『阿婆縛抄』

(8) ネパールに於るカトマンドウ、スヴァヤンブー寺院のハリーティなどにもその例を見ることが出来る。詳細は、前掲拙稿「ネパールにおけるハリーティについて——調査報告——」参照。

(9) 宮崎英修「日蓮宗における訶梨帝母信仰の変遷——鬼子母神・十羅刹女の融合と分離——」(『日本佛教学会年報』第十八号)昭和二十七年、日本佛教学会、一四二頁—一四五頁。

(11) 同右『日蓮宗の守護神——鬼子母神と大黒天——』昭和五五年、平楽寺書店。一二七頁——一四二頁。

図1、「十六大護」(一紙)、京都高山寺藏本(『大藏經』図像部六、三〇三頁、別紙三一)。

図2、「十六護圖」(『覺禪鈔』『大藏經』図像部五、二七一頁——二七三頁)。

図3、「十六大護」(一紙)、東京丹治竹次郎氏藏本(『大藏經』図像部六、三〇三頁)。

図4、「別尊雜記」(『大藏經』図像部三、四七三頁——四七七頁)。

図5、「十六大護」(一紙)、京都高山寺藏本(『大藏經』図像部六、三〇三頁、別紙三二)。

図6、「別尊雜記」(『大藏經』図像部三、四七八頁——四八一頁)。

(12) 「四種護摩本尊並眷屬圖像」智泉本(一卷)、京都醍醐寺藏本(『大藏經』図像部一、八一九頁——八八六頁)。

(13) 「寶樓閣曼荼羅」(一卷)、京都東寺觀智院藏本(『大藏經』図像部五、八四一頁——八五四頁)。

(14) 前掲論、宮崎英修「日蓮宗における訶梨帝母信仰の変遷——鬼子母神・十羅刹女の融合と分離——」

同右『日蓮宗の守護神——鬼子母神と大黒天——』

小川貫弍「パンチカとハーリティの帰仏縁起」(『佛教文化史研究』昭和四八年、永田文昌堂)。多田考正「鬼子母神信

仰の展開」

浅井圓通「日蓮の鬼子母神信仰」

池上尊義「日蓮における十羅刹女信仰の位置」

庵谷行亨「天台教籍にみる鬼子母神」

冠賢一「近世江戸における鬼子母神信仰——雜司ヶ谷鬼子母神を中心として——」

上田本昌「近世文学と鬼子母神信仰」

内野久美子「鬼子母神信仰にみる民衆の祈りと姿」

宮崎英修「鬼子母神信仰の研究」

(宮崎英修編『鬼子母神信仰』民衆宗教史叢書 第九卷、昭和六〇年、雄山閣出版)。

一、柔和相訶梨帝母

古来、訶梨帝母は、一子あるいは数子を伴い、豊満で端麗な容姿と、優しい柔和相を以って表現されて来た。現存するアジア諸地域の彫刻や絵画の中では、ほとんどのものが、ふくよかで、優しい表情を示している。

ガンダーラでは、訶梨帝母像は、紀元一、二世紀の頃から造像されて来たように、数子に取り囲まれて、夫の半支迦葉叉と共に、二神像として表わされた。その代表的なものとして、ペシヤワル博物館の、シャーリ・バホール出土のパンチカとハーリイティー彫像、またシャー・ジ・キ・デリー出土の彫像などがあげられるのをはじめ、数多くの浮彫像が残されている。

多くのガンダーラ仏がそうであるように、この二神も、ギリシア彫刻を思わせる写実表現により、身体や服飾など巧みに刻まれている。並坐像の向って右側に訶梨帝母は座し、ギリシア神風のその形相は、おだやかで、笑みすら感じ取られ、おおらかな柔和の相を充分に満たしている。

ガンダーラ出土のものには、二神像ばかりではなく、類似の形相を持った訶梨帝母の、単身像も見られる。ラホール博物館のシクリー出土のハーリイティー立像、あるいは東京国立博物館蔵のハーリイティー坐像では、それぞれ三子、五子を伴い、慈愛深い表情をたたえた母子の形像で彫刻されている。

また同じ頃、マトゥラーにおいても二神並坐像及び単身像が造られており、マトゥラー博物館のクベーラとハーリイティーや、あるいは大英博物館のハーリイティー倚坐像等々、現存する遺品は数多い。これらの彫像の中には磨耗

が甚しかったり、顔の欠落しているものも多く、またガンダーラ仏ほど繊細な表現が施されていないこともあり、それら総ての表情を充分に読み取ることはできないものの、子供を伴った二神像や、母子像であることと併せ、比較的原形をとどめている作品などから柔和相であることが認められる。

ガンダーラ及びマトゥラーなどで造像され始めた訶梨帝母は、全インドはもとより、ネパールやチベット、中国を経て日本へ、あるいは東南アジアへと、その伝播は、仏教東漸の経路と等しく、七世紀の遺品の中では、アジャンタ一第二窟のハリーティイーとパーンチカ並坐像がよく知られるところであろう。ジャワ現存のものでは八世紀の母子形を見ることができる。特にネパールでは、数体が、今なお厚い信仰を受けており、マトゥラー仏と類形のものを含め、それらはいずれも単身像で、柔和相と見て取れるのである。

中国においては、訶梨帝母信仰がどのようになされて来たのか、古今を通し、その詳細は今後の研究課題ともなり得る多くの問題を含んでいるが、十六世紀にまで降ったものでは、山西省大同善化寺の鬼子母神や、北京大慧寺の訶梨帝南天に柔和相の立像を見ることができようが、中国より我国へ伝来の訶梨帝母尊容は、いわゆる唐衣をまとった宋画風のものほとんどであり、儀軌に伝えられる記述も唐衣を付けさせることなど明記され、当時の日本と中国の仏教交渉の事実も、すでに明白なことなどから、十世紀頃までの中国には、我国へ伝えられた尊容と類形の訶梨帝母像が、仏典や儀軌の上にものぼっていたものと考えられる。

東大寺二月堂食堂の訶梨帝母坐像や、園成寺の訶梨帝母倚像などの彫刻や、醍醐寺三寶院の絹本画訶梨帝母像、淨瑠璃寺の吉祥天厨子絵の中に描かれている訶梨帝母などが我国で最古のものとして現存しているが、いずれも、唐衣や天衣をまとい、数子を伴った、ふくよかな天母形で表わされている。これらの尊容が、即ち、当時の中国の訶梨帝

母像とまさに同形のものであろうことは、想像に難くない。⁽²⁾

弘法大師空海による密教の請来と共に、訶梨帝母經が伝来し、訶梨帝母像も我國のものとなった。密教儀軌に基づいて描かれた訶梨帝母は、中国様のものであり、現存している彫像等も、儀軌の造像法に説かれる尊容と類似するものである。

訶梨帝母の造像法が記述されている経軌として、

『阿沙縛抄』諸世天 第四百十 訶梨帝母⁽³⁾

『覺禪鈔』天部 卷百七 訶梨帝母⁽⁴⁾

『別尊雜記』第八帙 天等部乙 卷第五十 呵利帝⁽⁵⁾

『成菩提集』卷第四之三 世天三 訶梨帝母⁽⁶⁾

『圖像抄』卷第十 天等下 訶利底母法⁽⁷⁾

『白寶抄』天部 訶利帝法雜集⁽⁸⁾

『白寶口抄』天部 訶利帝母法⁽⁹⁾

『大藥叉女歡喜母并愛子成就法^{亦名}訶哩底母經』一卷⁽¹⁰⁾

『訶梨帝母真言經』一卷⁽¹¹⁾

『行林抄』⁽¹²⁾

等をあげることができる。

これらの中では訶梨帝母の像を、それぞれ白紅色や金色、あるいは白色または青金色などと説き、また坐像の宝宣

台から垂れる足が、右足か両足かの相違こそあれ、女神の容姿は端麗に、装身具を以って飾り付け、美しい天女形で表現せねばならぬことを述べている。

しかし、形相についてはそのいずれも、触れてはいない。

ここにあげた儀軌に基づいて造像されたと思われる訶梨帝母の、現存する彫像や、画像を見る限りにおいては、柔和相とも忿怒相とも判明されにくく、天女形であることによって、即ち柔和相であるとは決め難い、無表情か、吊眼に口を結んだ、毅然とした表情すら感じられるのである。それはあるいは、彫刻されてから今日までの保存の状況や、時間的な経過のために、磨耗した部分が生じたり、ガンダーラ仏ほど写真描写による刻出がなされておらず、形式化をもたらしした表現法のためなのか、または、手描きによる儀軌の転写時における、筆圧の加減により、表情がいまいなものとなってしまうためなのか、等々の理由も考えられようが、そこには、信仰的な意味合いが係わっていたことも忘れてはならないであろう。

疱瘡の神として、病氣平癒や子供の守護神、あるいは多産豊饒の土着神であったハーリィティは、やがて仏教へと摂取され、密教の中で育っていく過程を経た。

著名な鬼子母神説話は、『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第三十一・第七門や、⁽¹³⁾『雜寶藏經』卷第九「鬼子母失子縁」⁽¹⁴⁾などの經典の中に詳しく記されている。説話という形で仏教へ流入し、戒を受けて帰仏して、伽藍の守護神や、仏教擁護の女神となり、やがて訶梨帝母神は、密教修法の本尊としての受容を見ることになった。

訶梨帝母を本尊とする修法とは、どのようなものであろうか、次に述べたい。

〔注〕

- (1) 詞梨帝母像の図版例は、前掲拙稿「詞梨帝母の持物、『吉祥裏』について」図1、34、及び、「ネパールにおけるハリーリ
ティ―について——調査報告——」写真1、19、写真23、26、写真28、写真30、33、写真36、37、参照。

(2) 同右

(3) 『大正蔵』図像部九、四三八頁、中段——四四三頁、中段。

(4) 『大正蔵』図像部五、四五八頁、下段——四七二頁、下段。

(5) 『大正蔵』図像部三、五九七頁、中段——六〇七頁、中段。

(6) 『大正蔵』図像部八、七三三頁、下段——七三六頁、下段。

(7) 『大正蔵』図像部三、五一頁。

(8) 『大正蔵』図像部十、一一三八頁、下段——一一四五頁、中段。

(9) 『大正蔵』図像部七、二一〇頁、下段——二一八頁、下段。

(10) 『大正蔵』二一、二八六頁、上段——二八九頁、中段。

(11) 『大正蔵』二一、二八九頁、中段——二九〇頁、中段。

(12) 『大正蔵』七六。

(13) 『大正蔵』二四、一二六〇頁、中段——一二六三頁、中段。

(14) 『大正蔵』四、四九三頁、上段。

二、訶梨帝母法とその功能

『南海寄歸內法傳』卷第一・九受齋軌則の条に、西方の諸寺では、唐の義浄（六三五―七一三）の頃には、訶梨帝母が、仏教伽藍の守護神や、僧院の食厨での修法の本尊であったことが、次のように伝えられている。

故西方諸寺。每於門屋處。或在食厨邊。素畫母形抱一兒子。於其膝下或五或三以表其像。每日於前盛陳供食。其母乃是四天王之衆。大豐勢力。其有疾病無兒息者。饗食薦之咸皆遂願。廣緣如律。此陳大意耳。神州先有名鬼子母焉。⁽¹⁾

訶梨帝母を本尊とする秘法を修することを訶梨帝母法という。経軌には、造像法と併せて、この修法の本義が述べられている。

『覺禪鈔』によれば、

訶梨帝母法 増益。秘云々。小野爲子修此法。

又爲除盜賊修之云々。⁽²⁾

とあり、東密の小野流においては、小兒の爲に、また除盜の爲に修するものであるという。

『阿婆縛抄』には、修法事として、

禾云。常爲小兒修之

是息災法也。若爲自行求福德者增益可修之云々。⁽³⁾

とあり、小兒の爲と、そして息災や增益の法として用いられるようである。

この修法によって得ることのできる機能は、『覺禪鈔』によれば、「發願」⁽⁴⁾において、

消除不祥 消除災難 息災延命

增長福壽 恒受快樂 無邊所願

決定圓滿 決定成就 殿內安穩

諸人快樂 乃以法世 平等利益

とあり、その後で次の事項に、こと細かく護摩事と修法が説かれている。⁽⁵⁾

「歡喜母現身事」、「七日孕事」、「祈難產事」、「貴人敬愛事」、「女人敬愛事」、「召所愛遠處事」、

「和夫妻不和事」、「治女人難婚」、「役使嚮體」、「伏怨家」、「脱枷梏」、「伏惡人」、「滅鬼魅」、「治鬼病」、「知病

存否」、「治喪家怖」、「慙毒中」、「消惡夢」、「勝輪訟」、「勝論義」、「樂聞言詞」、「令還負債」、「得伏藏」、「祈智

慧」、「得長壽」

『阿娑縛抄』には、「功能文」で、

……所求一切事皆悉圓滿⁽⁶⁾云々……

と記し、続いて、特に、有胎、惡夢消滅、一切事欲求成就、そして、夫妻和合を説いている。

これらには、現世利益的な、小兒の爲、加えて增益、息災の法として、あらゆる祈念が込められており、訶梨帝母

法は、それらが総て、円満に成就される修法として説かれているのである。

また、食事作法としては、

『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第三十一、「第七門第一子攝頌日」⁽⁷⁾において、瞻部洲のあらゆる声聞の弟子たちは、毎食事に衆生食を出し、ならびに行末において、食一盤を設け、訶梨帝母と五百の兒子の名字を呼べば、皆飽食して永く飢餓に苦しむようなことはさせないであろう、と仏陀によって誓約されている。これと同事項は、『大藥叉女歡喜母并愛子成就法亦名訶哩底母經』に、次のごとくみられる。

時歡喜母白佛言。世尊若如是者、我乃諸子當於何食。佛言汝但慈心不害有情、我當勅諸聲聞弟子、每於食次常與汝食。并於行末置一分食。呼汝名字并諸子等皆令飽滿。若有餘食、汝可迴施一切鬼神。皆悉運心令其飽足。⁽⁸⁾

『南海寄歸內法傳』卷第一九・受齋軌則の中にも同じく次のごとく述べられている。

凡論西方赴請之法。并南海諸國、略顯其儀。西方乃施主預前禮拜諸僧。齋日來白、時至。……食前全無呪願之法。施主乃淨洗手足。先於大衆前。初置聖僧供。次乃行食以奉僧衆。復於行食末。安食一盤。以供呵利底母。⁽⁹⁾……

古くから餓鬼のために施食を供養する作法は、よく知られるところである。訶梨帝母に一匙の出生を供養することは、現在、真言宗で用いられている『仏前勤行次第』の「食事略作法」に、次のようにうたわれている。

次に出生食しゅっさば一匙諸仏 一匙諸賢 一匙六道衆生 一匙不動尊一匙調利帝母 一匙永迦羅天 一匙四天王

次に供養偈

此食色香味 上獻十方仏 中奉諸賢聖

下及六道品 等施無差別 隨感皆飽滿

令諸施主得 無量波羅密

汝等鬼神衆 我今施汝供 此食遍十方

一切鬼神供⁽¹⁰⁾

柔和相の訶梨帝母像は、ここに述べた通りの利益、功能の爲になされる修法の本尊として、我国のものとなり切ったのである。『覺禪鈔』は健保五（一二二七）年に、『阿婆縛抄』は文永一二（改元建治元・一二七五）⁽¹¹⁾年にそれぞれ成っている。

さて、他方忿怒相訶梨帝母もすでに同じ頃儀軌にのぼっている事を忘れてはならない。忿怒相と聞けば、日蓮宗における鬼形鬼子母神が代表されるものと思われよう。独尊で立像の忿怒相鬼形鬼子母については、やはり、日蓮以前に溯るものはないと見てよからうが、今ここにあげる忿怒相訶梨帝母というは、その尊容は、さきに述べた柔和相の

ものと同様に唐衣をまとった、天女形ではあるが、一連の忿怒尊に属する、天部、明王部、あるいは菩薩部の中で登場するのである。

忿怒相訶梨帝母は、如何なる儀軌によって、どのような尊容で表わされているのであろうか、そしてまた、その修法及び功能とは、どのようなものを持つものとして説かれているのであろうか。

次に、忿怒尊としての訶梨帝母像が含まれている図像集を中心に見ていきたい。

〔注〕

- (1) 『大正蔵』五四、二〇九頁、中段、一四行目——二〇行目。
- (2) 『大正蔵』図像部五、四五八頁、下段、二行目。
- (3) 『大正蔵』図像部九、四三八頁、中段、二一行目——二三行目。
- (4) 『大正蔵』図像部五、四六八頁、上段。
- (5) 『大正蔵』図像部五、四六八頁、下段——四七〇頁、中段。
- (6) 『大正蔵』図像部九、四四一頁、中段、二七行目。
- (7) 『大正蔵』二四、三六二頁、中段、二四行目——二八行目。
- (8) 『大正蔵』二一、二八六頁、上段、一四行目——一九行目。
- (9) 『大正蔵』五四、二〇九頁上段、九行目——中段、六行目。
- (10) 『仏前勤行次第』昭和五九年、高野山出版社印刷局、四九頁、七行目——五〇頁、六行目。
- (11) 『阿婆縛抄』は、宮崎英修博士によると一二七五年に、宮島新一氏によると一二六〇年に、庵谷行亨氏によると一二八一年に完成したとされる。

三、忿怒尊としての訶梨帝母

忿怒形の訶梨帝母としてまず取りざたされるのは前述の如く、日蓮宗の祈祷の本尊として受容されている鬼形鬼子母神であろう。

日蓮宗における訶梨帝母は、『法華經』卷第八「陀羅尼品」第二十六に拠るもので、十羅刹女との関係を持って曼荼羅上に表わされたが、一方ではやがて、独尊の総髮合掌形鬼子母、あるいは有角抱児形鬼子母としての尊容をもつて本尊とされるに至った。この鬼形への変換は、現在の研究では、室町時代末か、または江戸時代初期を溯¹⁾ることはなく、日蓮宗独自の訶梨帝母像容の確立として、ここにその変遷を見ることができるのであるが、その点についての詳細は、論を改めて述べるであろうが、本論では、日蓮宗祈祷本尊とは形像を異とする、年代的にも溯るところの、天母形忿怒尊についての考察をすすめていくものとしたい。

儀軌に図かれている天母形忿怒尊としての訶梨帝母像は、「十六大護図」、「四種護摩本尊及眷屬圖像」、「寶樓閣曼荼羅」等の圖像集の中に見ることができる。これらに描かれた忿怒の相を持った諸尊と共に、訶梨帝母像も表わされているのである。

ここでは、調伏法圖像の一つである十六大護図(図1-6)を取り上げ、その像容と修法及び功能等についてみていきたい。

十六大護とは、調伏法に用いられる十六神、つまり十薬叉、三龍王、三天后のことを言う。「轉法輪菩薩摧魔怨敵法」に、この十六神の名を挙げ、唐国の守護神であり、各々には五千の神將を眷属とすることを『別尊雜記』『轉法輪』では、次のごとく記述している。

……彼護國土神於幢上。如此。大唐國土者。所謂

毗首羯磨藥又 劫比羅藥又 法護藥又 肩目藥又 廣目藥又 護軍藥又 珠腎藥又 滿賢藥又 持明藥又 阿吒吒藥又 縛俱藥又 已上十大藥又

嚙蘇枳龍王 蘇摩耶龍王 補沙毗摩大龍王<sup>已上三
大龍王</sup> 訶喇帝大天后 翳羅嚙蹉大天后<sup>已上
大天后</sup> 雙目大天后<sup>已上
大天后</sup> 各有五千神將。以爲眷屬。……⁽³⁾

『覺禪鈔』「轉法輪」⁽⁴⁾では、十六神の名を次の文字で著わしている。

毘首羯磨。劫比羅。法護。肩目。廣目。護軍。珠賢。滿賢。持明。阿吒縛俱。雙目。蘇摩那。補沙毘摩。大龍王訶利帝。翳羅縛。蘇。蘇。

また『阿婆縛抄』『轉法輪』⁽⁶⁾、『白寶抄』『轉法輪法雜集上』⁽⁷⁾においても、右の二儀軌と同名を以って記述されている。

十六大護は、「轉法輪」に説かれているが、『大方等大集經』卷五十五⁽⁸⁾には、震旦國の守護神として次の十六神と眷屬を挙げている。

迦毘羅大夜叉 法護夜叉 賢月夜叉 大目夜叉 勇健夜叉 摩尼跋陀夜叉 賢滿夜叉 持威德夜叉 阿荼薄拘夜叉 般支迦夜叉與眷屬。婆修吉龍王 須摩那果龍王。弗沙毘摩龍王及與眷屬。呵梨帝鬼子母天。伊羅婆雌天女 雙瞳目天女及與眷屬。⁽⁹⁾

ここでは、毘首羯磨天子及與眷屬を十六神の前に置き、計十七神の名を述べている。

この中の般支迦夜叉というのは、訶梨帝母の夫であり、ガンダーラなどでは、パーンチカ、あるいはクベーラの名で、訶梨帝母と共に、二神並坐で造像されていることは、前述のごとくである。

さて、十六神はのように、漢字名及び、梵字名で記されているが、また図像でも表わされている。十六神の描かれている図像を、十六大護図と言う。

儀軌による、十六大護図の図様と各尊の形像を、『別尊雜記』(図4・6)、『覺禪鈔』(図2)の各所伝と、京都高山寺藏本(図1・5)、東京丹治竹次郎氏藏本(図3)、金剛峯寺本(注(20)参照)を取り上げ述べていきたい。

『別尊雜記』には

轉法輪菩薩摧魔怨敵法

長寛二年二月十七日於小田原菴

室授宰相阿闍梨心覺畢 實心

件日記醍醐實闍梨授儀軌等給之時也」⁽¹⁰⁾

として、二図をあげている。その図様は、いずれも上下二段に十六大護を列し、横長の図像曼荼羅としている。

第一図(図4)は、十葉叉のうち八葉叉を上段に、下段には他の二葉叉と、三龍王、三天后が配されている。まず上段には右から、法護葉叉、毗首羯磨葉叉、却毗羅葉叉、肩目葉叉、阿吒縛俱葉叉、滿賢葉叉、護軍葉叉、廣目葉叉の順に、下段には右より、珠賢葉叉、持明葉叉と、続いて縛蘇枳龍王、蘇摩那龍王、補沙毗摩龍王、そして雙目天后、訶梨帝大天后、翳羅縛差大天后が配され各尊の図像には、それぞれ漢字名も付記されている。さらに左下段には小さく漢字で、八幡、賀茂、春日と記されているのは、「轉法輪念誦記」中の「輪次第」⁽¹⁴⁾「車水次第」⁽¹⁵⁾等に、十六大護に加えて、八幡三所大明神、賀茂上下大明神、春日四所大明神等々の名が、真言と共に説かれていることから、これらの日本神の名号を文字で表わしたものと思われる。

この図のうち、十葉叉は総て立像であり、却毗羅、持明、阿吒縛俱の三葉叉は舞勢をとっている。阿吒縛俱葉叉のみ三面八臂で二鬼を踏んでいるが、他の九葉叉は、一面二臂で台座はない。珠賢と持明の二葉叉においては輪光をもっている。条帛と裳をまとい、各々の持物を持ち、いずれも髪は逆立てた火髪形にして、眉をしかめ、目尻をつり上げ、忿怒の形相を示している。

三龍王は、共に三龍の冠を載き、輪光を具し、各々持物を持って荷葉座に趺坐している。条帛と裳を着け、胸飾りと腕釧で飾り、首には三道が描かれているが、形相はやはり忿怒の相をとっている。

三天后においては、宝冠を付け、輪光を具し、唐衣と天衣をまとい荷葉座に坐している。持物については、雙目は右手に劍を執り、翳羅縛差は右手に宝珠を持っている。訶梨帝天后は、右手に吉祥菓⁽¹⁶⁾を持ち、左懷中に嬰兒を入れて左手をあてている。形相は、いずれも柔和の相を取ってはおらず、忿怒相と見て取ることができる。

第二図(図6)は、十六神が上下兩段に八神ずつ配されている。上段には右から、毗首羯磨藥叉、却比羅藥叉、法護藥叉、肩目藥叉、廣目藥叉、護軍藥叉、珠賢藥叉、滿賢藥叉が、下段には、右から持明藥叉、阿吒縛俱藥叉に続いて、蘇摩那龍王、補沙毗摩龍王、縛蘇枳龍王そして訶梨帝、翳羅縛蹉、雙目の三大天后の順に列せられている。

十六神は総て一面二臂の立像であり、台座はない。十藥叉は裳だけをまとい各々左手に持物を持ち、髪を逆立てた忿怒形である。三龍王は、宝冠を付け、武装をして右手に劍を持つ。いずれも忿怒相である。三大天后は、垂髪に宝冠を戴き唐衣である襴襦衣、長袂衣等を着け、杳を履いている。持物はなく、両手を前に、着物の中に入れている。忿怒相を示しているが、他の十三神ほど明らかではない。

以上二図の中にみられる訶梨帝母像は、座像、立像の違いこそあれ、共に垂髪に宝冠を戴き、首には三道を有し、唐衣を着けている。そして、忿怒の相を示す忿怒尊として描き出されている。

『別尊雜記』では、この十六大護図を、五十七巻のうち、「第六帙 忿怒部八卷」中に説いている。訶梨帝母は、第一図には、訶梨帝天后、第二図では訶梨帝と漢字名で記されている。

次に『覺禪鈔』百三十六卷では、「明王部」卷八十三「轉法輪」に

十六護圖

以醍醐圖寫之。小野簡圖少

と違。銘勸修寺以御本書之⁽¹⁷⁾

と題して、図像と併せ漢字名、梵字名を記している。

図様は、大まかな三段で構成されているが、三段目はさらに二段別されているので、各尊は四段に配されていることになる。上二段には十葉叉、下二段には三龍王と三天后が配列されている。

十葉叉は、上段右から、法護、毘首羯磨、却比羅、肩目、廣目の五神、下には右から、阿吒縛俱、滿賢、護軍、瑜堅⁽¹⁸⁾、持明の順に、三段目には三龍王が、補沙毗摩、縛蘇枳、蘇摩那の順に、四段目には、三天后の、雙目、訶利帝、翳羅嚩多が各々配されている。

十六神各々の像形は『別尊雜記』第一図に類似しているが、肩目葉叉の持物に若干の違いがみられ、阿吒縛俱葉叉は、三面を取らず、三面の頂上仏を戴いている。また、輪光は、どの尊にも具されていない。

この図様は醍醐寺理性院流のものと思われ、同流のもので十六神が四段に配列されているものとしては、「長寛二季二月廿日理性院阿闍梨御本持本写」と書銘の金剛峯寺における調伏法図像⁽²⁰⁾、京都高山寺蔵の十六大護一紙(図1)をあげることができる。前者には、図像に加えて梵字名が記されたものと漢字名が付記された二種類のものがあり、

後者には、梵字が書き添えられている。訶梨帝母は、訶利底大天后の名で書かれている。

上下二列に配されているものには他に、東京丹治竹次郎氏蔵本の一紙(図3)をあげることができよう。この十六大護図には次の漢字名が付記されている。

法護藥叉、阿多波俱藥叉、毗首羯磨藥叉、滿賢藥叉、劫毗羅藥叉、護軍藥叉、肩目藥叉、珠賢藥叉、廣目藥叉、持明藥叉、縛蘇枳龍王、蘇摩大龍王、補沙毗摩龍王、雙目天后、訶利帝母、翳羅毘摩賀⁽²¹⁾

他方、小野流と思われるものとしては、前述の『別尊雜記』における第二図の他に、京都高山寺蔵本の一紙(図5)があげられる。前図は、二段からなる構成であったが、後者は四段で、上二段に十葉叉が、三段目は三龍王、最下段に三天后が配され、いずれの尊像も、忿怒形をとっている。

訶梨帝母の像容は、醍醐理性院流では、坐像で輪光を有する天母子形であるのに対し、小野流では、立像で輪光も持物も具さない、天女形であることを特徴とする。

訶梨帝母法に用いられる訶梨帝母像の作図法が説かれている儀軌には、坐像の天母子形とすることが明記され、独尊として修法の本尊とされることはすでに述べた通りである。

しかし、立像であり、子供も伴わない忿怒形で、単独尊の造像法は儀軌には載せられていない。

柔和相訶梨帝母は、民間の子安信仰としてばかりではなく、訶梨帝母法の祈禱本尊として受容され、忿怒相においても、十羅刹女との係わりや、日蓮宗のみばかりではなく、すでに平安時代には、調伏法圖像の中に顕わされていた

のである。

では、十六大護図を用いる調伏法とは、どのような修法であり、機能を持っているのであろうか。

2、十六大護図の修法と機能

轉法輪には、轉法輪菩薩摧魔怨敵法の修法に、十六大護の図像を描き用いることが説かれているのであるが、轉法輪菩薩は、弥勒菩薩の本身とされる大輪明王の教令輪身で、纔^{さい}発心轉法輪菩薩とも呼ばれる。この菩薩は、三十七尊に因み、また八大菩薩の一つでもあるとされている。⁽²²⁾

十大藥叉、三大龍王、三大天后の十六神及び日本国中の諸大明神等は、轉法輪菩薩の眷属で、修法の護持にあたり、調伏法には、十六大護の諸尊が描かれた図像曼荼羅が用いられる。

調伏法は『自寶抄』によると、「轉法輪法雜集」上の冒頭に、

調伏 廣云。行法付十八道。但可加四無量觀勸講祕事也。付調伏修之。本軌云。於其中夜圖一方壇於方壇上重盡三角壇○其解法者向南而坐。⁽²³⁾云々

と記されているごとく、行法には十八通りあり、他に勸請祕事が加えられる。調伏の修法は、壇上に三角の護摩炉と図を描き、南向きに坐して夜中に行なうものとしている。

十六大護の調伏法は、いわば勸請の秘法として特に、軍陣力の強化や、敵を倒す、あるいは防ぐための怨敵法に用

いられるものである。

『別尊雜記』「轉法輪菩薩摧魔怨敵法」によれば、

……若有隣國侵擾國界。或自國內軍衆寡少。或復怯弱。或有不臣起惡叛逆。即應取善揀木而作一幢。長十二指。周圍八指。削令極圓。如世尊所勅。一切天龍八部令護諸國。護諸國王。及護國界一切有情。爲除災禍。令得安樂。若難起時。皆圖畫彼護國土神於幢上。如此。大唐護國土者。所謂……⁽²⁴⁾

と述べられ、続いて十六神の名があげられる。各々神將五千の眷屬があること、そして修法の方法等が次のように説かれてゐる。

……所應畫者皆畫本形。執持標幟圖於幢上。又於幢頂上畫無礙王十字佛頂。眞言末後⁽²⁵⁾字在輪臍中。所有怨敵叛逆主師。當畫彼名於輪輻間。於幢底面畫一輪。具足八輻。如上⁽²⁶⁾字置輪臍中。若災難起時。應請一解法之人。於此教中會稟受者。於其中夜圖一方壇。於方壇上重畫三角壇。立於此幢在壇中央。於壇四面著種々食飲并二閼伽。燒安悉香。及燃蘇燈。其解法者面南向座。即結一切如來鈎印。以二手內相叉作拳。以右頭指爲鈎。及誦眞言稱名。請召十六大護及其眷屬大威德諸神將等。壇中供養。如來鈎眞言曰⁽²⁵⁾

……令得安樂。辟除災禍。今我國境有其難事。汝等大護助我軍陣。摧破怨敵汝等當令彼軍被縛迷悶。令某荒

亂。使我軍兵強盛得勝⁽²⁶⁾。

これと同意の事項は「轉法輪念誦記」⁽²⁷⁾においてもみられるのであるが、『覺禪鈔』、『阿沙縛抄』、『白寶抄』等の儀軌や、真言の秘密儀軌⁽²⁸⁾の中にも説かれている。

また特に、簡事においては、筒納物として、十六大護は用いられ、その概要を、『秘密儀軌傳授口決』八巻のうち卷三、金剛部「轉法輪菩薩摧魔怨敵法」⁽²⁹⁾では、筒の中に轉法の六臂の像を入れ、怨家の貌姓名等を踏令めて蓋を覆い、筒の寸法に十六大護を筒の外に彫り廻し云々と述べている。『白寶抄』では「簡事」⁽³⁰⁾で、金剛の筒を用いて行うこの修法を詳細に記述し、『覺禪鈔』「筒納物」⁽³¹⁾には、香、及び菓事も含めて詳しく説いている。

十六大護諸藥叉を勤請しての発願は、「発願句」によると、

……消除不祥 消除災難 增長寶壽 恒受快樂 無邊御願 決定圓滿 院内安穩 諸入快樂 天下々々 平等々々⁽³²⁾

と複数の機能を唱えている。

さて摧魔怨敵法の機能としては、勅言の願いが叶うのであれば、為施主令得安穩。避除災禍摧怨敵。助我軍陣力強盛。他軍被縛致迷悶、そして、悉皆消滅無怨敵ということになる。

十六大護の機能は複数であるが、特に、十六大護図による修法は、調伏法によるもので、悪人除去、除難降伏といったまさに、怨敵のための秘法であることが明らかにされよう。

昨年(昭和五九年)秋に高野山真言宗総本山、金剛峯寺の聖教古文書調査で見つかった「調伏法図像」は、この十六

大護と一致するもので、その銘に「長寛二季二月廿日理性院阿闍梨御本持本写」とあるところから、『別尊雜記』所伝の圖像の銘による年号と一致しており、また作者も同じ宝心であろうと思われることなど、平安時代には、この十六大護図は政敵降伏に用いられたことを明らかにさせる具体例として、貴重な資料であり、注目に値する。

以上、忿怒尊訶梨帝母像の融合をみる圖像集の一つである十六大護図について述べ来った。この圖像の用いられる修法の、最も求められる機能は、悪魔や、敵を屈伏させる、摧魔怨敵ということにある。

訶梨帝母法 of 機能中には認められない、摧魔怨敵の機能が、訶梨帝母を含めた忿怒の諸尊による秘法の中に見られることは、あるいは、忿怒相訶梨帝母の神格を示唆し、意味付けるものとして、今後の研究の糸口になり得るものでもあろう。

[注]

- (1) 宮崎英修「鬼形鬼子母神の出現」『鬼子母神信仰』民衆宗教史叢書 第九巻(昭和六〇年、雄山閣出版、三五〇頁——三七三頁。

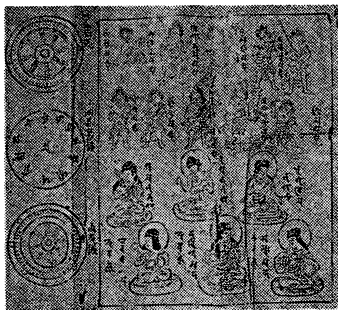
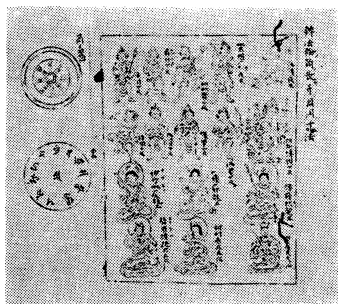
同右「日蓮宗における訶梨帝母信仰の変遷——鬼子母神・十羅刹女の融合と分離——」『日本佛教学会年報』第十八号、昭和二七年度、日本佛教学会、一四二頁——一四五頁。

同右『日蓮宗の守護神——鬼子母神と大黒天——』昭和五五年、平楽寺書店、一二七頁——一四二頁。

- (2) 『大正蔵』圖像部三、四六七頁、中段——四八六頁、下段。

- (3) 同右、四六七頁、中段、二四行目——下段、九行目。

- (4) 『大正蔵』図像部五、二六九頁、上段——二八〇頁、上段。
 - (5) 同右、二六九頁、上段、一九行目——二四行目。
 - (6) 『大正蔵』図像部九、二九三頁、下段——二九四頁、下段。
 - (7) 『大正蔵』図像部十、九六〇頁、下段——九七〇頁、下段。
 - (8) 『大正蔵』十三、三六二頁、下段——三七一頁、上段。これは、三六二頁、注の④によると、『大集目藏經』卷第九に相当する。
 - (9) 同右、三六八頁、下段、五行目——十一行目。
 - (10) 『大正蔵』図像部三、四七二頁、下段、八行目——十一行目。
 - (11) 本文では、比。
 - (12) 本文では、嚙。
 - (13) 本文では、蹉。
 - (14) 同右、四六九頁、中段、一三行目——四七〇頁、上段、一八行目。
 - (15) 同右、四七〇頁、上段、一九行目——下段、八行目。
 - (16) 前掲拙稿「訶梨帝母の持物・『吉祥集』について」参照。
 - (17) 『大正蔵』図像部五、二七〇頁、中段、二行目——四行目。
 - (18) 本文では、珠寶。
 - (19) 肩目葉叉の持物は、左手に宝珠、或は右手に宝棒とする。小野簡図では、左に鉾を把る。
 - (20) 高野山真言宗総本山・金剛峯寺の聖教古文書調査で昭和五九年秋に発見されたもの。
- 理性院流は、京都・醍醐寺の賢覚が流祖で、弟子の宝心(一〇九二—一一七四)が確立したとされる。長寛二季は、一一六四年で、宝心の高野山時代と一致していることから、宝心直伝の可能性が強い。



「調伏法図像」金剛峯寺

(21)

ここに用いた漢字は、『大正蔵』図像部六、三〇三頁、「十六大護」による。

(22)

『祕密儀軌傳授口決』八卷、卷三、金剛部「轉法輪菩薩摧魔怨敵法」(『真言宗全書』№・10) 昭和九年、三四六頁、上段。

『白寶抄』「轉法輪法雜集」上、『大正蔵』図像部十、九六〇頁、下段——九六五頁、下段。

(23)

『大正蔵』図像部十、九六〇頁、下段、二行目。

(24)

『大正蔵』図像部三、四六七頁、中段、一八行目——下段、一行目。

(25)

同右、四六七頁、下段、九行目——二二行目。

(26)

同右、四六八頁、上段、一四行目——一七行目。

(27)

同右、四六八頁、下段、六行目——四七〇頁、下段、八行目。

(28)

『祕密儀軌隨聞記』三十卷、第八卷「轉法輪菩薩摧魔怨敵法」(『真言宗全書』№・8) 昭和九年、一八五頁、下段、七行

目——一八六頁、上段。

(29)

『真言宗全書』№・10、三四六頁、上段、一三行目——一五行目。

(30)

『大正蔵』図像部十、九六三頁、中段。

(31)

『大正藏』図像部五、二七〇頁、下段。

(32)

同右、二七六頁、下段、一九行目——二二行目。

結び

調伏法は我国では、密教を伝えた空海以降であるが、インドでは三千年に及ぶ歴史を持つ。

インドにおいて土俗神であった頃から、訶梨帝母も他の神々のいくらかがそうであったように、あるいはそれは、シャマニズムや、アニミズム的色彩の濃いものであったであろうかも知れないが、いわゆる祈祷の本尊として厚く尊崇を受けていたに違いなからう。

現在我国でなされている訶梨帝母祈祷と類似した機能を持つ儀礼が、ネパールでも現に行われている。それはネパール仏教である密教金剛乗・ヴァジュラヤーナにおいての訶梨帝母儀礼で、この女神独尊を祈祷の本尊として、司祭によって修法儀礼が盛んに行なわれている。⁽¹⁾ここでも、救済や祈願成就をはじめとする、あらゆる現世利益が目的とされているのである。

この儀礼が、シャマニズムや、土着の信仰と、いかような結び付きがあったのか、あるいは、ネパールに見られる訶梨帝母信仰が、インド及び、発生の地から伝来のものであるのか、中国より逆に西漸したもののかについては、俄に解明すべきものではないが、多くの宗教儀礼は、長い歴史の上に培われて来たのであり、仏教思想が、インドから中央アジア、中国などを経て我国へもたらされたのと同様に、訶梨帝母は、複数的な機能を携えながらも、祈祷の本尊であるとする根強く定着した信仰形態を確立し、その軌跡を、経軌などの文献の上にも、現行の信仰の様相の面にも残しているのである。

ここに、指摘されるべき事項として、二点述べておきたい。まずはじめに、柔和相訶梨帝母は、単に安産や子育てといった民間信仰としてばかりではなく、息災や増益法の修法の本尊として用いられて来たということ。二点目には、忿怒相訶梨帝母は、日蓮以降の日蓮宗の中にみられる祈禱本尊としての、鬼形鬼子母神のみを指してそれとするべきではなく、すでに、伝来の軌経にのぼるものであるということ。それは諸尊に融合された図像集の中に見出されるものであり、特に十六大護図は、調伏法である摧魔怨敵法に用いられたのである。

忿怒相像については、チベット仏教の中で、ペル・ラムという名で登場し、ラダックのラマ教寺院の勤行堂前壁には、同形のものが、護法尊ハモとして描かれている。⁽³⁾また中国においては『歷代名画記』卷三の記述の中に、鬼神が描かれていた記事がしばしば見られ、『寺塔記』の招福寺の条には、庫院に鬼子母神の絵画があったことも伝えている。⁽⁵⁾

訶梨帝母は、もとは藁叉女であったことから、鬼神ともされ、また羅刹女の衆として説かれることもある。西域や中国の寺院壁画等に描かれた鬼神の絵の総てが訶梨帝母であったかどうかは、定かではないが、おそらく幾つかは、忿怒相の訶梨帝母像であったに違いなからう。

訶梨帝母の形相は、日本に伝来される以前においてすでに、特異な二類性として、柔和相と忿怒相を示していたのか、または教令輪身としての忿怒尊であるのか。あるいは、現在、鬼形鬼子母は独尊であるが、それは、図像集にみられる如く、忿怒尊として諸尊に含まれていたものが、やがて分離して独尊となったのか、従来、確立した神格を持ち独立していたものが、忿怒衆に融合され、尊容の変遷を得た後、現在の形相をもって再び独尊となったのであろうか、等についての考究は、今後の課題となろうが、十六大護図にみる忿怒尊訶梨帝母像あるいは、図像集の中に現わ

れる忿怒尊についての考察を糸口として、研究を進めていくものとしたい。

〔注〕

- (1) 前掲拙稿「ネパールにおけるハーリイティーについて——調査報告——」参照。
- (2) 同右。
- (3) 同右、八三頁、下段、八行目——八四頁、下段、六行目。
- (4) 「両京・外州の寺觀の画壁を記す」(張彦達、長廣敏雄 訳注『歴代名画記』——東洋文庫305、昭和五二年、平凡社、一八四頁——二六〇頁)。
- (5) 同右、一九二頁、二行目。



図1 十六大護図 京都高山寺蔵本



図2 十六夜図 『覺禪抄』

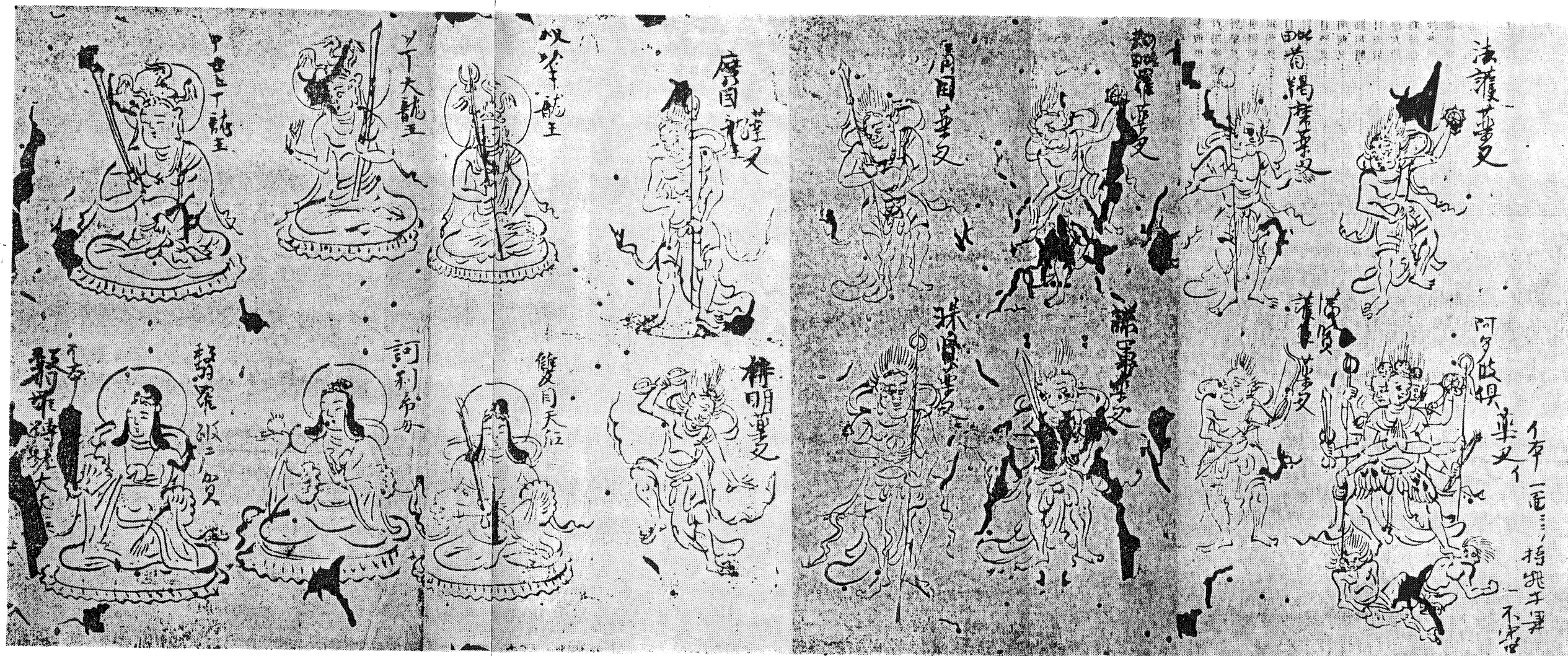


図3 十六大護図 東京丹治竹次郎氏藏本



图4 十六大護図 『別尊雜記』

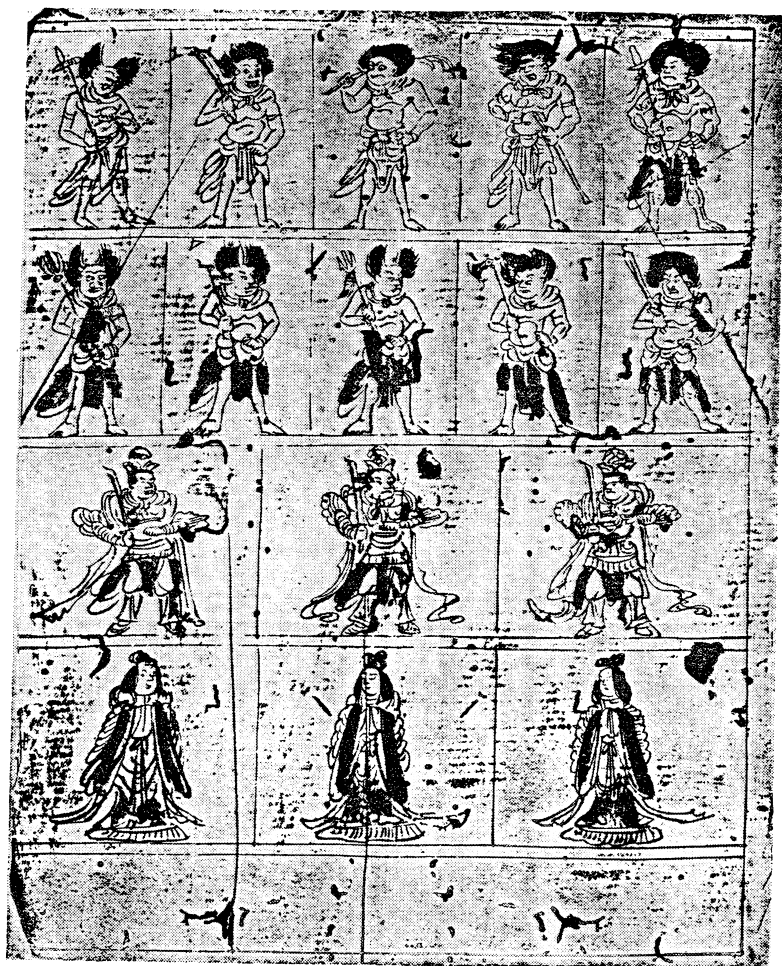


図5 十六大護図 京都高山寺蔵本

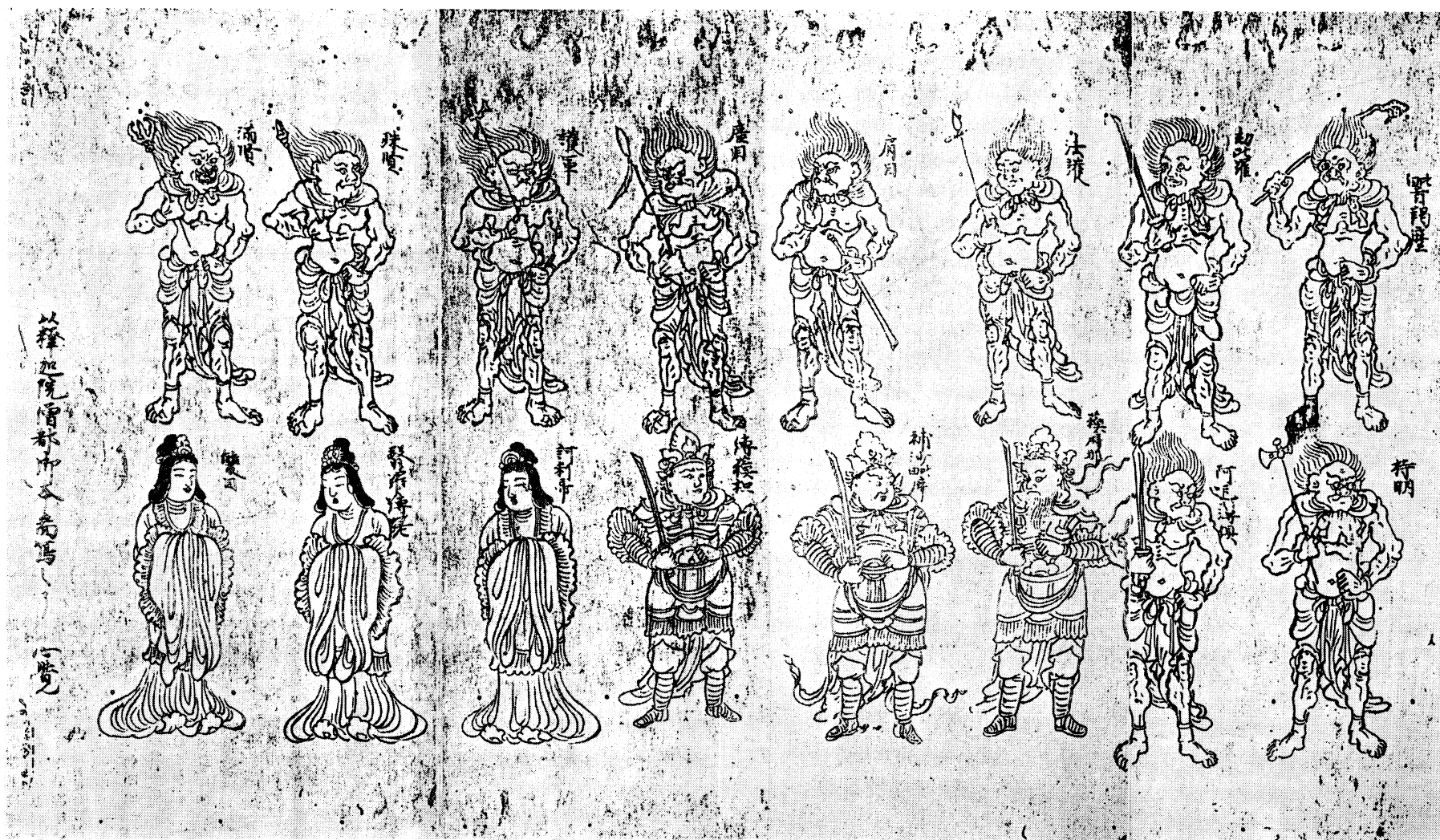


图6 十六大護図 『別尊雜記』